

### 昆虫を通して自然を見る



小湯の上 青木 由親よしちか

八重山、海外の熱帯雨林まで印象に残っている環境はたくさんあるのですが、最終的には生まれ育った下諏訪の地の自然環境について考えが巡ります。

皆さんは、昆虫というどのようなことを思い浮かべるでしょうか。気持ちが悪いか、不思議だとか、人によって色々あるかと思いますが、私にとって昆虫というのは「興味の尽きない、とても面白い存在」です。

以前は採集というスタイルで、ここ十五年は写真を撮影することを主眼に置いています。行動範囲も日本各地から東南アジアまで広がり、昆虫に関わることを勉強していくうちに昆虫を通じて自然環境そのものを見ていくようになりました。北海道か

人になると、「そんなのありえない」とか「羨ましい」等と言われますが、下諏訪の自然環境とはどのようなものなのでしょう？

下諏訪の自然を語るうえで外せないのは、八島ヶ原湿原と東俣谷です。両方とも間違いなく、諏訪地方でも屈指の自然環境が残されている場所です。特に東俣谷は、湖水周りでは唯一と言っているほどの森林環境が残されており、諏訪地方全体の宝と言えます。

しかし残念ながら、本当に良い環境はそれぐらいしかないと感じます。特に里山環境においては雑木林がほとんど残っておらず、大部分がカラマツの植林です。カラマツの単植林は、一部の生物以外にとって生息しにくい環境で、昆虫たちはパッチ(まだら)状に、残った広葉樹林にしがみつくように生きてきています。私が見たスミナガ



好きな蝶 スミナガシ

シもそうした場所に残っていたものでしょうし、クワガタムシやカブトムシといった雑木林の昆虫が少ないのも、こうした環境の影響でしょう。そのため私も里山的な昆虫を探すときには下諏訪以外に出かけるようになってしまいました。

今、周りの山々を見ると緑一色ですが、その中にどれだけの健全な自然が残されているのでしょうか？「緑がある＝自然が豊か」と短絡的に結論付けることはできません。社会構造の変化と同様に、自然環境も大きく変化してきています。これから先、下諏訪の自然がどのような推移を辿っていくのか、見続けていきたいと思っています。

### 畑仕事の楽しさ



西弥生町 笠原 愛子

今年も、畑仕事ができる季節になりました。町民菜園を借りて七年目になります。家庭内の状況もいろいろと変わり、思うように動けない時もありましたが、自然と触れ合うことが好きな私は、趣味と実益を兼ね楽しく畑仕事をしてきました。

春一番、畑を掘り起こすことから始めます。冬の間凍った土が溶け、まだ柔らかいうちに鍬を入れまわります。掘り起こした土の中から、カエルが飛び出したりミミズが出てきてびっくりしたり…。きれいに耕した黒々とした土を見ると、今年は何を作ろうかと意欲が湧いてきます。畑の仕事は、種まきに始まり、苗植えや成長した枝の脇芽を摘んだり、支柱に縛り付けたりと、

次々に仕事が出てきます。トマトが大好きな私は、まずトマトの苗をたくさん植えるので、他にきゅうり、なす等植えるときぐいっばいになってしまいます。

手をかけた夏野菜が実る頃が張り合いの時です。収穫した野菜を「今採りトマトで、無農薬だから安心だよ」と朝の食卓に出すと、「おばあちゃんの作ったトマトはおいしいよ」と孫も喜んで食べてくれます。また初冬にはたくさん白菜が収穫でき、鍋物にたっぷり入れて食べると身も心もほかほか、ほかにも漬物にしたり、お裾分けしたりして、全て食べきってしまいます。

種をまき雨が降ると、もう芽が出たかな、今日は少しは伸びたかなと、成長していく野菜の芽の可愛らしさに癒され、土の



3月 お孫さんとホウレンソウを採りに

中から顔を出した小さな命からパワーをもらいます。しかし順調に育ってくれる作物ばかりではありません。せっかく大きくなっても、病気になるってしまった実がついても腐ってしまったりと、がっかりすることもあります。今年も失敗に終わってしまったから、来年は良い物を作ろうと先輩に教えてもらったり、情報交換したりしながら毎年励んでいます。

五月から十月頃までは、暑さが苦手なので朝五時には家を出て、一時間程畑作業をしてからラジオ体操に行くことが、十数年続く朝の習慣になっています。朝の空気は清々しく、まだ人気がない道を七、八分歩いて着いてみますと、もう仕事をしている友達もいます。

野菜作りと体操で、一日の生活リズムが生まれ健康づくりにもつながっていると思うので、一年でも長く続けられたら嬉しく思います。

